

INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■運営委員会報告	1
■総会報告	2
■大会後記	3
■大会決算報告	5
■大会感想記	6
■お知らせ	7
■日本学術会議だより	8
■研究会のお知らせ	10
■研究助成金	11
■会員異動	18
■賛助会員	24
■広告掲載、賛助会員入会のお願い	25

NO. 75

OCTOBER 1993

日本発生生物学会

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学 理学部 動物学教室

会 長：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中44
基礎生物学研究所 発生生物学系 形態形成部門
江口吾朗（電話 0564-55-7570）

D G D 編集主幹：〒 060 札幌市北区北10条西 8 丁目
北海道大学理学部動物学教室
片桐千明（電話 011-716-2111 内線 5298）

D G D 編集幹事：〒 724 東広島市鏡山 1 - 3 - 1
広島大学理学部動物学教室
嶋田 拓（電話 0824-22-7111 内線 2824）

事 務 局：〒 444 岡崎市明大寺町字西郷中38
基礎生物学研究所 生殖研究部門
（幹 事 長） 長浜 嘉孝（電話 0564-55-7550）

学 会 セ ン タ ー：〒 113 東京都文京区本駒込 5 - 16 - 9
学会センター C21
財団法人 学会事務センター
日本発生物学会担当係（電話 03-5841-5810）

日本発生物学会への入退会，住所・所属変更，会費納入，および出版物（D G D，イン
フォメーション・サーキュラーなど）の郵送については，上記の日本学会事務センターに書
面でお問い合わせ下さい。

10月より新事務局になっておりますので御注意下さい。

第50回 運営委員会議事録

第50回運営委員会は、1993年5月25日午後5時より、福岡リーセントホテルにおいて開催された。

出席者(敬称略)：

江口吾朗(会長)、浅島誠、安部眞一、天野實、井出宏之、岡田益吉、片桐千明(兼編集主幹)、佐藤矩行、塩川光一郎(兼幹事長)、中辻憲夫、星元紀、八杉貞雄、安増郁夫(以上運営委員)、嶋田拓(編集幹事)、山名清隆(大会準備委員長)、田代康介(庶務幹事)、浅野美咲(会計幹事)

1. 会長挨拶

2. 報告及び審議事項

1) 庶務報告

- ・1993年4月30日現在の会員数は991名であり、1993年1月1日から48名増加した。

正 会 員：815名(+27名)

学生会員：176名(+21名)

(賛助会員：12団体)

- ・サーキュラー74号を発行した。

- ・第16期学術団体の登録申請を行なった(承認は9月の予定)。

3) 会計報告

1992年度決算報告及び1993年度暫定予算案(サーキュラー74号参照)が提出され、審議の結果了承された。

4) 会計監査報告

野村一也(九州大学理学部)氏より1992年度会計監査の結果について、会計は適正であった旨、報告された。

6) DGD編集委員会報告

- ・1993年の投稿数が昨年までより激減しているので、質の高い投稿を呼びかけたい旨提案され、了承された。
- ・現在の発生物学の分野の拡大によって編集作業が困難になっていることから、編集主幹を補佐する副編集主幹(associate editor)及びadvisory boardを設置したいとの提案がなされ、審議の結果了承された。この件は、総会で了承を求めることにした(総会議事録参照)。
- ・1994年度から編集主幹を星元紀氏(東京工業大学)にお願いすることが提案され、了承された。

7) 学術会議報告

8) 第26回(1993年)大会準備委員会報告

- ・下記の日時、場所で開催予定であることが報告された。

1994年5月25(水)～27(金)日

仙台市民会館

10) 第28回(1995年度)は、基礎生物学研究所、長浜嘉孝氏にお世話をお願いすることが提案され了承された。

11) 幹事長の交代について

- ・塩川幹事長の任期切れに伴い、次期幹事長を基礎生物学研究所、長浜嘉孝氏にお願いすることが提案され、了承された。

12) 科学研究補助金、複合領域・基礎生物科学・発生物の審査委員の選出について

- ・審議、投票のうえ、第1段審査委員及び第2段審査委員候補者をそれぞれ選出した。

- 13) D G D 編集委員のうち運営委員会が委嘱する 3 名について審議し、投票によって下記の 3 名に決定した

岡田 益吉, 片桐 千明, 竹市 雅俊 (敬称略)

第26回 総会報告

第26回総会は、1993年5月27日午後1時30分より、福岡リーセントホテルA会場において開催された。議長に佐々木直井氏(西南大学)を選出した後、以下の次第で議事がすすめられた。

1. 山名清隆大会委員長挨拶
2. 江口吾朗会長挨拶
3. 報告, 審議事項
 - 1) 庶務報告(田代康介庶務幹事)
本号運営委員会報告参照(P2)
 - 2) D G D 編集委員会報告
本号運営委員会報告参照
 - 3) 学術会議報告(安増郁夫氏)
4. 審議事項
 - 1) 1992年度決算報告(浅野美咲会計幹事)
サーキュラー94号参照
 - 2) 会計監査報告(田沢栄五郎会計監査委員)
監査の結果, 会計処理は適正であった旨報告された。
 - 3) 1993年度予算案(浅野美咲会計幹事)
サーキュラー94号参照
 - 4) D G D 編集委員会組織変更について
D G D 編集委員会に編集副主幹(associate editor)およびadvisary boardを設置すること(運営委員会報告参照)が提案され, 了承された。これに伴い会則, 付則第5条を変更する。
5. 次期大会準備委員会から挨拶(井出宏之氏(東北大・理))
本号運営委員会報告参照

第26回 大会後記

九州大学理学部 山 名 清 隆

日本発生物学会第26回大会を、なんとか無事に終えることができた。たくさんの方々のおかげである。会長、会員みなさん、とくにシンポジウムのオーガナイザー（佐方功幸先生、西田育巧先生）や座長としてご援助くださった方々、準備委員、九州大学、福岡女子大学、西南学院大学の職員、院生、学生さんたちに心から感謝します。

大会を引き受けることになってまもなく、会場探しと広告・寄付集めにとりかかった。広告と寄付は、最近の不景気を反映してか、はじめのうちは軒並に断われた。一時は、「大会は中止」というお詫びをインフォメーションサーキュラーに出すことも考えたほどであった。

会場探しも難航した。土曜日が休みになったためか、一日中、それも3日間続けて借用できる講義室はなかった。このような事情は、他の大学でも大同小異であろう。今後、講義室を利用して大会をおこなうには、大会の会期を春休み（冷暖房の設備があれば夏休みや冬休み）にしなければならないだろう。また、もし大会の会場をいまの2つから3つあるいは4つに増やすことが許されるなら、土曜日と日曜日の2日間ですませることができるとも知れない。もちろん会議室のようなところもあたってみた。いくつか大きな会議室があったが、学会が使用することを認めないところや、午後5時以降の使用を許可しないところが多かった。これらの会議室はたがいに離ればなれになっていて、大会会場として使用することはできなかったが、大学や文部省には学会活動に対するいっそうの理解を望みたい。また、ことあるごとに「文化都市」を標榜している福岡市にも援助の可能性を打診してみた。学会支援のための資金など1円もなかったし、学会会場として使えそうな施設もまったくなかった。このように大学のなかにも公共の施設のなかにも会場がないことがわかったので、福岡コンベンションビューローに頼んで、ひろく市内を調べてもらった。その結果、経費の点からみて、リーセントホテルが唯一の会場候補であることがわかったのは、前の大会の前日の夕刻のことであった。横浜市開港記念会館に電話をして、開催中の運営委員会によりやく間に合わせることもできた。

このたび気になったことのひとつは、当日参加である。今日のように交通が便利になると、日本のどこからでも数時間で会場に到着することができる。こうして、おもいがけない数の当日参加者が会場につめかけることになる。昨年の大会後記によれば、参加者のほぼ半数が当日参加者であった。参加者が多いことは盛会のための重要な条件であるから当日参加に不平を言うべきではないし、わたし自身が当日参加の常習犯であるから不平を言う資格もないことはよくわかっている。しかし、今回、24年ぶりに準備をしてみて、やはり当日参加者が多すぎるのは困ったことだともった。かなりの余裕を見込んでおいたはずの会場で、腰掛けられない人がでるのである。それだけではない。当日参加者が多くなると収入の見通しもたえず、支出の予定もたてられない。これでは準備をするものにかかるストレスはきわめて大きくなる。そのうえ、収入の一部をなんらかの形で直接に参加者へ還元することもできない。このように考えてくると、まえにも指摘されたことであるが、参加申込を締切る時点で参加者数ができるだけ正確にわかることが望ましい。そこで、締切申込期間内の申込を積極的にエンカレッジし、反対に当日参加をいくらかディスカレッジする方法として、当日の参加費と懇親会費を通常の1.5倍あるいは2倍にしようだろうか。この方法は、意図するところが同じであるかどうかは知らないが、すでにあちこちで採用されているようである。

つぎに、この「大会後記」を書くために、はじめてここ数年間の決算報告書をみた。そして次の

おもいがけないことを発見した。この4～5年のあいだ参加者がたいへんな勢いで増え、それにとまって支出総額もウナギ登りに増えている。ところが支出総額を参加者数で割って得られる1人当りの経費は、年によって変動しているものの、支出総額や参加者数のように増加の一路をたどっているわけではない。むしろ、支出総額から懇親会への補助を差し引いてみると、1人当りの経費はだいたい5000円のレベルに落ち着く。つまり、懇親会のことを考えなければ大会の経費はだいたい参加費で賄えるのである。この発見は、わたしにとってまことに意外であった。もっと早くこのことを知っていたら、参加費の値上げはしなかったであろう。ほんとうに残念であり、申し訳ない。それに、広告や寄付がまったく集まらなかったときにも、あんなに心配することはなかった。他方、懇親会の補助は、少ない年で7～8万円、多い年では50万円近い。このお金は、（大会経費を賄っているのが参加費だとする立場にたって言うと）学会、大学、会社などからの援助、寄付、広告料などから支払われていることになる。そして、この懇親会への補助を支出した後に残る30～50万円の「残金」は、DGD基金として学会に寄付されている（学会は大会に25万円を補助しているから、実質的なプラスは5～25万になる）。ともかく、こうして大会経費の大部分は参加費で賄うことができるという大発見をしたので、ここに書いておきたい。そして、今後大会を引き受ける方々が気軽にお引受けになることを、そして、広告や寄付を集めることよりも、大会そのものをおおいに楽しく有意義なものにすることに全力をあげてくださるよう期待したい。

ここに述べたことは、準備委員会とはいっさい関係ないことを申し添えておきます。

最後に、準備委員会の方々のお名前を記し、感謝の意を表したい。

景浦 宏、小泉 修、古賀克己、小早川義尚、佐々木直井、西嶋克司、野村一也、美濃部純子、毛利孝之、山本喜代子、弓削昌弘（アイウエオ順）。

日本発生生物学会第26回大会決算報告

大会運営関係経費

1. 収入の部

大会参加費	2,413,000 円
内 訳 一般 (6,000円×288名)	1,728,000 円
学生 (5,000円×137名)	685,000 円
(非会員のシンポジウム招待者, 会場運営の学生会員を除く)	
学会本部からの補助金	250,000 円
広告代金・賛助金	1,300,000 円
講演要旨集印刷費補助	750,000 円
講演要旨集売り上げ	8,000 円
収入合計	4,721,000 円

2. 支出の部

講演要旨集関係	981,600 円
内 訳 印刷代金	937,300 円
宅配便送料	39,150 円
座長依頼はがき・郵便	5,150 円
名札印刷費	22,660 円
講師申し込み用紙・はがき原稿印刷代金	47,380 円
会場使用料 3日間	857,442 円
会場運営経費 (マイク・スクリーン使用料その他)	351,348 円
人件費	807,900 円
シンポジウム経費 (謝金)	30,000 円
弁当経費	37,900 円
休憩室菓子・コーヒ一等経費	37,112 円
懇親会補助	478,388 円
文具・通信・準備委員会経費	357,952 円
支出合計	4,009,682 円

3. 残金 (DGD基金へ全額寄付) 711,318 円

懇親会経費

1. 収入の部

懇親会参加費 (5,000円×251名)	1,255,000 円
広告代・寄付金からの補助	478,388 円
収入合計	1,733,388 円

2. 支出の部

懇親会経費	1,733,388 円
-------	-------------

3. 残金 0 円

第26回大会に参加して

加 藤 秀 生（立教大学一般教育部生物学研究室）

私にとって今回の福岡での学会は3月末にアメリカから帰国してからの最初の全国大会でした。そのために、帰国したときにはすでに学会参加申し込みが〆切になっており、計らずも気楽にお客さんとして参加させていただきました。そんな様子をどうも察知されたようで、大会についての感想文を書く羽目になりました。

この1月にカリフォルニア州アシロマでウニ研究者の会議がありましたので、その会議と今回の大会を比較して日米の生物学会の様子を考えてみようと思います。ウニ会議はウニ胚の発生を扱う会議ですから、種々の生物の発生現象を扱う福岡での学会とはかなり趣を異にしますが、発生現象を扱うと言う意味では大差はないでしょう。両方の学会とも発生現象の基本にある遺伝子制御に注目が集まっている点では共通します。この点については、この欄に他の方も同様の感想を書かれるでしょうからここでは省きます。また、両方の学会とも大学院生や若手の研究者が多く参加していることも共通しています。しかし、今回の福岡での学会の私に取っての驚きは医学関係の方々が非常に多く参加されていたことでした。したがって、当然と云うべきかはわかりませんが哺乳類を使った研究が非常に多く見受けられました。この様な状態は大いに歓迎すべきことです。無脊椎動物や両生類等の脊椎動物を使った研究に見られた現象が哺乳類にも同様に起きていることが確認できて、従来の発生学会を知っている皆さんは大いに気を良くされたのではないかと思います。アメリカのウニ会議でも医学関係の研究者が大勢参加しています。癌研究所からも沢山の研究者がきています。しかし、これらの研究者は哺乳類だけでなくウニ胚も重要な研究材料として取り入れています。むしろ昨今の分子生物学的に形態形成現象を解明するにはむしろウニ胚の方が扱い易いということで、E. Davidsonの名著を引用せずともそれはよく理解されているようです。したがって、ウニ胚研究者の絶対数も急激に増えています。彼らはウニ胚のような扱い易い材料で得られた結果を哺乳動物胚のように構造的にも、生理学的にも複雑な材料を研究する重要な依りどころとしているようです。したがって、同じような遺伝子発現制御を題材にしても彼らの扱い方は当然の過程として展開しているように見えます。一方、我が発生学会に見られる遺伝子関連の研究にはまだ肩肘を張っているようなところが見受けられるようです。しかし、後10年ほどもするとこのようなことは無くなり、遺伝子を扱うために発生現象を用いるのではなく、発生現象を理解するための遺伝子研究という風潮になって来るのでしょう。これは私が十数年前にアメリカにいたころの成長因子の研究熱が今日日本へ伝わった様子と非常によく似ているように思えます。ともあれ、すでに多くの方が御指摘になっているように、日本の発生学は分子生物学の時代に突入したことは間違いありません。次の課題は、先に述べた意味で、いつ分子生物学の時代を突き抜けるかでしょう。最後になりますが意義深い大会を準備していただいた九州大学の皆様に感謝致します。

会則の変更について

第26回総会の決議に基づき以下の様に会則を変更する。

1. 付則第5条の全文を以下のように変更する。

付則第5条 欧文誌の編集は、次の通り行う。

1. 編集主幹は、運営委員会が委嘱する。
2. 編集委員は、3名を運営委員会を選び、さらに、発生生物学の動向を考慮に入れて10名内外を編集主幹が指名する。このうち、3名内外を編集副主幹（associate editor）に編集主幹が指名する。
3. 以上のほか、専門領域等を考慮して、若干名の advisory board を編集主幹が指名する。

2. 付記に以下の項を追加する。

8：1993年5月27日、第26回総会に於て付則第5条を変更する。

DGD編集主幹の交代について

運営委員会報告にありますように、これまでDGD編集主幹として御苦勞いただいた片桐千明先生（北大・理）にかわって1994年度（Vol 36）から星 元紀先生（東工大）に担当していただくことに決定致しました。投稿論文の送付先など御注意お願いします。

事務局より

運営委員会報告にありましたように、幹事の交代に伴い事務局も変更になりました。本号までは、従来の事務局で発行を担当しましたが、手違いがあり発行が非常に遅れましたこととお詫びいたします。本号の表紙には旧事務局名を、表紙裏には新事務局を記載いたしました。今後のお問い合わせなどは新事務局にお願い致します。

「学術分野における国際貢献についての基本的提言」を採択

平成 5 年 5 月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月21日から23日まで第116回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、同総会の議事内容及び同総会で採択された「学術分野における国際貢献についての基本的提言」等についてお知らせいたします。

日本学術会議第116回総会報告

日本学術会議第116回総会（第15期・第5回）が、4月21日～23日の3日間にわたって開催された。

総会の初日の午前中は、会長からの前回総会以降の経過報告に続いて、各部、各委員会等の報告が行われた。次いで、今回総会に提案されている2案件について、それぞれ提案説明がなされた後、質疑応答が行われた。

午後からも提案案件に対する質疑応答が行われた後、引き続き各部会が開催され、午前中に提案説明された総会提案案件の審議が行われた。

総会2日目の午前中は、前日提案された2案件及び緊急に提案された1案件の審議・採決が順次行われた。

まず、「国際対応委員会の改組について(中合せ)」が採択された。これは、学術の国際化の急速な進展に伴い、国際学術団体及び国際学術協力事業への対応の重要性がますます増大してきており、日本学術会議としてもその職務を遂行する上で、学術の国際化に関する状況の迅速かつ確かな把握が不可欠であるという観点から、より広範囲にわたる国際学術情報の収集と、それに基づく適切な対応ができるよう、国際対応組織の充実強化を図るために、必要な措置を講じたものである。

次いで、「学術分野における国際貢献についての基本的提言」が採択された。本件については、日本学術会議第15期活動計画の中の重点目標として掲げられており、また、一昨年秋の第113回総会において内閣官房長官から、「学術研究の分野で我が国がどのような国際的貢献をなすべきかについて全学問領域から総合的に検討し、意見を出すよう」求められ、以来、日本学術会議における重要案件として鋭意審議してきたものである。

提言は、1. 学術分野における国際貢献の意義、2. 学術分野における国際貢献の在り方、3. 学術分野における国際貢献を進めるための提案という構成内容になっており、日本学術会議は、今後とも、本提言に基づき、具体的な諸課題について検討していくこととしている。

最後に、上記の提言に基づき、日本学術会議は、国際貢献のための新しいシステムを構築するための具体的方策を直ちに検討し、その速やかな推進を図るという内容の「学術分野における国際貢献についての基本的提言に関する附帯決議」が採択された。

また、「学術分野における国際貢献についての基本的提言」に関する会長談話を22日付けで発表した。

午後からは、現在、常置委員会、特別委員会で審議されている懸案事項について、自由討議が行われた。

総会3日目は、午前中は各特別委員会、午後は各常置委員会・国際対応委員会がそれぞれ開催された。

なお、近藤会長が、4月22日に河野内閣官房長官と、また、同27日に宮澤内閣総理大臣とそれぞれ会見し、「学術分野における国際貢献についての基本的提言」を手渡すとともに、同提言について報告した。

学術分野における国際貢献についての基本的提言（抜粋）

（前文略）

1. 学術分野における国際貢献の意義

（本文略）

2. 学術分野における国際貢献の在り方

（本文略。項目のみ）

- (1) 対等・互恵の原則に基づいた国際学術協力の強化
- (2) 国際学術協力の積極的発議等
- (3) 人材育成への協力による国際貢献の推進
- (4) 我が国の学術情報の提供・紹介の促進
- (5) 学術に関する国際団体への対応強化

3. 学術分野における国際貢献を進めるための提案

前節で述べた我が国の学術分野における国際貢献の在り方を踏まえ、これを推進していくために、以下の事項を提案する。

(1) 我が国からの情報提供機能等の充実・強化

① 学会の支援・育成

我が国の学会は、高等教育研究機関や産業界の研究成果の発表の場として重要な役割を果たしてきた。また、研究者相互の活発な国際交流等を通じて、情報の提供に努めているところである。しかしながら、ほとんどの学会は、資金の不足から、必要な活動も十分にできない状況にある。

学術分野における国際貢献という観点において、非政府機関（NGO）としての学会の果たす役割は極めて大きく、それらが有する情報提供機能を最大限に発揮できるよう、学会の支援・育成を図る必要がある。

② アジア地域における学術研究に関する連携の強化

我が国と地理的・歴史的・文化的な関係の深いアジア地域の学術の発展に資するため、アジア地域の科学者や学術研究機関の間の学術研究ネットワークを拡充・強化することが必要である。また、将来的には、アジアの学術振興のための国際的な組織の在り方について、関係各国の科学者と協議していく必

要がある。

(2) 国際学術交流のための支援の充実

① 学術研究機関の整備等

新しい知識の創造と発展は、優れた研究者が集い、切磋琢磨するところから生まれるものであり、研究者の未知への挑戦に対して最も適切な施設・資金・支援システムなどの研究環境を提供することが必要である。したがって、全世界の研究者が日本で研究することに魅力を感じ、充実した研究生活が送れるように、学術研究機関の整備及び適切な運営を図るべきである。

② 来日研究者・留学生への支援の充実

学術分野における国際貢献の第一歩として、各国の人材育成への協力、とりわけ来日研究者・留学生の支援に十分な配慮がなされなければならない。したがって、内外における日本語教育の充実や、来日研究者・留学生の住居、日本人研究者・学生や地域の人々との交流を可能とする交流施設など生活・文化施設の整備・充実を早急に図るべきである。

③ 海外派遣研究者への支援の拡充

国際学術交流は、相手国の国情に応じた総合的配慮の下に行われる必要がある。したがって、その国の研究者との恒常的な連携・協力を維持するとともに我が国からの海外派遣研究者が必要とする各種情報の提供や連絡・調整などもできる人材の当該国への配置など、海外派遣研究者の支援体制の拡充を検討する必要がある。

(3) 学術分野における国際貢献のための新しいシステムの構築

国際的な学術協力については、我が国においても、既に多くの機関がその努力を重ねているところである。しかしながら、投入されている資金等そのための支援は、質・量ともに、未だ国際的な要求に応える水準にまで達しているとは言えない。しかも、現在個別に推進されている学術協力の相互の連絡・調整は、必ずしも十分ではなく、我が国の総力を挙げてこれを推進しているとは言えない状態にある。

また、今後ますます増えていくと思われる各種の国際的な学術協力プロジェクトの立案や協力、参加、推進については、これまで以上に、科学者の総意を反映しつつ、総合的かつ適切な判断を機動的になし得る場を確保しなければならない。

さらに、我が国が国際的な学術協力のための諸施策を強力に推進するためには、科学者の力のみならず、政府・産業界の協力、更には国民の理解等総合的な支援が必要である。

これらの問題点を改善し、学術分野において国際社会の期待に応える貢献をなし得るように、国民の理解の下に、諸課題の整理、必要な資金の確保・配分等を行う新しいシステム（例えば「学術協力機構」）を構築するなど、今後真剣に検討を進める必要がある。

終わりに

日本学術会議は、人類共通の資産としての学術の発展こそが人類の繁栄と世界の平和の礎となるとの見地から、本提言を取りまとめたものである。

なお、日本学術会議は、今後とも、本提言に基づき、内外の科学者を始め、広く関係各方面の意見を聴きながら、具体的な諸課題について引き続き検討していくことを付言したい。

平成5年(1993年)度共同主催国際会議

日本学術会議では、我が国において開催される学術関係国際会議のうち毎年おおむね6件について、学・協会と共同主催している。

本年もまた、6件の国際会議を共同主催することとしており、その概要は、次のとおりである。

◆第7回太平洋学術中間会議(6月27日～7月3日)

太平洋地域の住民の繁栄と福祉に直接関わる学術上の問題に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として宜野湾市(沖縄コンベンションセンター、沖縄都ホテル、メルパルク沖縄)において開催される。

参加予定人数500人(国外300人、国内200人)、参加予定国数29か国。

◆第6回国際気象学大気物理学協会科学会議及び第4回国際水文科学協会科学会議合同国際会議(7月11日～23日)

気象学、大気物理学及び陸水・水文科学に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市(横浜国際平和会議場)において開催される。

参加予定人数1,500人(国外700人、国内800人)、参加予定国数68か国。

◆第15回国際植物科学会議(8月23日～9月3日)

植物科学に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として横浜市(横浜国際平和会議場)において開催される。

参加予定人数4,000人(国外1,500人、国内2,500人)、参加予定国数81か国。

◆第24回国際電波科学連合総会(8月23日～9月3日)

電波科学に関する研究を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として京都市(国立京都国際会館)において開催される。

参加予定人数1,200人(国外800人、国内400人)、参加予定国数49か国。

◆アジア社会科学研究協議会連盟第10回総会

(9月5日～11日)

アジア・太平洋地域における社会科学の教育、研究、訓練及び普及を促進するため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として川崎市(かながわサイエンスパーク)において開催される。

参加予定人数120人(国外60人、国内60人)、参加予定国数17か国。

◆第21回国際純粋・応用物理学連合総会(9月20日～25日)

物理学を進展させるため、討論を行い、最新の研究情報を交換することを目的として奈良市(奈良県新公会堂)において開催される。

参加予定人数300人(国外150人、国内150人)、参加予定国数41か国。

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291(代)

第10回 哺乳類全胚培養研究会

1994年1月28日(金)午後1時30分より、東京医科歯科大学1号館特別講堂にて
シンポジウム：Embryo Manipulations towards Molecular
Embryology

- 1) 分子・細胞レベルでの発生研究を行うための鳥類胚培養法/阿形清和(姫路工大)
- 2) 体節から中軸骨格への形態形成——どうして肋骨は胸にしかないのか？——/青山裕彦(福井医科大学)
- 3) マウス胎仔生殖細胞の培養と移植/橋本光一郎(明治乳業ヘルスサイエンス研)
- 4) 器官形成期哺乳類の胚操作と培養法/大隅一，山下典子(東京医科歯科大学)
- 5) マウス小脳の細胞発生——retrovirus-mediated gene transfer によるアプローチ——/三宅敏彦(塩野義製薬研究所)

参加費：学生2000円，一般5000円

問合先：東京医科歯科大学・大学院生体機能歯科学系・発生機構制御学講座
内 哺乳類全胚培養研究会事務局 Tel03-3813-6111 ext5291,
FAX 03-5689-7650

第8回研究助成候補者推薦要領

(寄附行為第4条第1号, 研究助成事業)

平成5年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的で国際的評価に値する研究を助成する。研究分野は、脳神経に関する実験研究のみならず理論・モデリング研究をも含む。候補者は、単独であっても、また共同研究であってもよいが、なるべく若い研究者の推薦を希望する。

2. 研究助成金

助成額は1件100万円、助成件数は8件とする。

3. 推 薦 者

- (1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推 薦 件 数

1推薦者から1件に限る。

5. 推 薦 方 法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いてもよい)

6. 推 薦 締 切 日

平成5年11月30日(火)とする。

7. 選 考 の 方 法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 採 否 の 通 知

平成6年3月末日までに推薦者あて、採否を通知する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成6年5月末までに研究助成金を送呈する。

10. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載の通り使用することを原則とする。なお、経理報告書を平成7年4月中旬に提出すること。

11. 成 果 の 報 告

研究の成果については、平成7年4月中旬に成果報告を当財団に提出するものとする。また、財団主催の研究会において発表を御願ひする。助成金による研究を専門誌に発表する場合には、“財団法人ブレインサイエンス振興財団(英文の場合は, Brain Science Foundation)の助成による”旨を書き添えること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電 話 (03) 3273-2565 (直通)

第8回塚原仲晃記念賞受賞候補者推薦要領

(寄附行為第4条第2号、褒賞事業)

平成5年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者（国内外を問わない。）に対して塚原仲晃記念賞を贈呈する。

2. 褒 賞 金

贈呈件数は原則として1件とし、賞牌ならびに副賞（200万円）を贈呈する。

3. 推 薦 者

- (1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推 薦 件 数

1推薦者から1件に限る。

5. 推 薦 方 法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。（複写用紙を用いてもよい。）

6. 推 薦 締 切 日

平成5年11月30日(火)とする。

7. 選 考 の 方 法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 選考結果の通知

平成6年3月末日までに推薦者および受賞者あて通知する。

9. 塚原仲晃記念賞の贈呈、その他

贈呈決定者に対して、別途通知する。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電 話 (03) 3273-2565 (直通)

第7回海外派遣研究助成候補者推薦要領

(寄附行為第4条第3号, 国際交流事業)

平成5年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

我が国におけるブレインサイエンスの研究の促進を図るため, 国際学会, シンポジウム等への参加, あるいは短期間(6ヵ月以内)の共同研究のための研究者の海外派遣を助成する。

ただし, 平成6年4月から平成7年3月の間に出発出来るものに限る。

2. 助成予定額

(1) 予算として150万円を計上している。

(2) 1件あたりの助成額は, 往復の航空運賃を主とし, 40万円を限度として若干件を助成する。

3. 推 薦 者

(1) 関係学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推 薦 件 数

1推薦者から1件に限る。

5. 推 薦 方 法

所定の用紙に必要な事項を記入し, 当財団に提出する。(複写用紙を用いても良い。)

6. 推 薦 締 切 日

平成6年1月11日(火)とする。

7. 受入先の承諾書

受入先の承諾書(学会, シンポジウム等参加の場合は, 参加証明書または招待状の写を, 短期の共同研究の場合は, 受入機関または共同研究者の手紙の写)を添付すること。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し, 理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成6年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては, 平成6年4月以降に出発時期に応じて送呈する。

11. 助成金の使途

助成金は, 推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

帰国後2ヵ月以内に派遣の成果について, 報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電 話 (03) 3273-2565 (直通)

第7回海外研究者招聘助成候補者推薦要領

(寄附行為第4条第3号, 国際交流事業)

平成5年6月

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間(3ヵ月以内)の招聘(旅費または滞在費)を助成する。

ただし、助成金は、外国人研究者を招聘する受入責任者に交付する。

2. 招 聘 の 時 期

平成6年4月1日から平成7年3月31日の間に外国の研究者を招聘するもの。

3. 助 成 予 定 額

(1) 予算として100万円を計上している。

(2) 1件あたりの助成額は、往復の航空運賃または滞在費とし、40万円までを限度として必要額を助成する。

4. 推 薦 者

(1) 関係学会代表責任者または受入責任者の所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

5. 推 薦 件 数

1推薦者から1件に限る。

6. 推 薦 方 法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いても良い。)

7. 推 薦 締 切 日

平成6年1月11日(火)とする。

8. 選 考 の 方 法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採 否 の 通 知

平成6年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成6年4月から必要に応じて受入責任者に送呈する。

11. 助成金の使途

外国人研究者招聘助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成 果 の 報 告

招聘の成果について、招聘後2ヵ月以内に受入責任者より報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電 話 (03) 3273-2565 (直通)

山田科学振興財団

1994年度研究援助候補推薦要項

援助の趣旨及び内容

1. 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助を致します。実用指向研究は援助の対象としません。
2. 援助額は1件当たり300～700万円、総額5,000万円、援助総件数は10件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考致します。
3. 援助金を給与に充てることは出来ませんが、他の用途は自由です。
4. 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計2年間とします。

推薦方法

- イ. 推薦者：本財団が依頼した学(協)会の代表者
- ロ. 推薦件数：1推薦者ごとに2件以内
- ハ. 推薦手続：推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。

1. 所定の推薦書用紙又はその写しに必要事項を記入したもの 4部
2. 添付書類(研学(94)-5/8ページ参照)

記載上の注意

- イ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

推薦締切期日

本財団に推薦書が到着する締切期日は
1994年3月31日です。

選考方法

選考委員会において選考の上、理事会が決定します。

選考結果の通知

1994年7月末迄に推薦者及び代表研究者等宛て文書にて通知します。

援助金の贈呈

選考結果の通知後適時銀行振込にて贈呈致します。

推薦書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)
〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号
電話 大阪(06)757局3311(代表)

研究の成果及び会計の報告

援助金の受領者には、後日当財団の連絡に基づき、研究経過、研究成果、会計について報告書の提出及び研究交歓会での発表をして頂きます。

付 記

- イ. 援助金の用途を変更する場合には、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 研究成果を文書によって発表される際には、本財団(財団法人 山田科学振興財団, Yamada Science Foundation)の援助による旨を記載し、報文の類にあってはその別刷1部、また著書の類にあってはその1部をご寄贈願います。
- ハ. ご提出頂きました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

研究者各位へ

推薦者の項に対応する学(協)会は次記のとおりです。学(協)会により締切期日及び募集方法等が異なりますから、代表研究者は応募の際、各学(協)会にお問合わせ願います。

日本天文学会	日本化学会	日本生理学会	日本生物物理学会
日本物理学会	高分子学会	日本遺伝学会	日本発生生物学会
応用物理学会	日本農芸化学会	日本分子生物学会	日本植物生理学会
日本金属学会	日本薬学会	日本動物学会	日本植物学会
地震学会	日本生化学会	日本細胞生物学会	日本免疫学会
地球電磁気・地球惑星圏学会			

1994年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者 及び研究助成候補者について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞(猿橋賞)を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、1990年3月に本会を母体として新設された、公益信託「女性自然科学者研究支援基金」(受託者・東洋信託銀行株式会社)から支出されます。

■猿 橋 賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50才未満)に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務所までお送り下さい。
5. 締切は1993年11月30日(必着)。
6. 第13回の賞贈呈式は、1994年5月、東京において行なう予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

- | | | |
|------------|-------------------------------|---------|
| 第11回(1991) | 北海道大学薬学部教授 | 森 美和子博士 |
| | 「医薬品合成のための新しい反応の開発」 | |
| 第12回(1992) | 国立核融合科学研究所助教授 | 加藤 隆子博士 |
| | 「高温プラズマの原子過程の研究」 | |
| 第13回(1993) | 東京大学教養学部教授 | 黒田 玲子博士 |
| | 「非対称な分子の右左やDNA塩基配列の識別のしくみの研究」 | |

■研究助成

1. 海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において、満40才未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務局までお送りください。
4. 締切は1993年11月末日と、1994年4月末日の2回。

なお、1992年度の研究助成金受給者は次の通りです。

氏 名	学位	所 属	出張先
朴(小野)恵淑理博		筑波大学地球科学系外国人研究者	アメリカ
森 陽子薬学修士		北里大学看護学部助手	フランス
池田 裕子工博		京都工芸繊維大学助手	中 国
田村 知子修士		大阪市立工業研究所研究員	中 国
井上 美穂理博		京都大学霊長類研究所講師	フランス
内海紀代美修士		東京大学大学院理学研究科在学	アメリカ
木下 圭理学修士		日本医科大学助手	アメリカ
本間美和子医博		東京医科歯科大学医学部助手	アメリカ

女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217
電話03-3330-2455(FAX兼用)

会 員 異 動

〈新入会員〉

(氏名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ、②材料)
小林 隆志	ヘキストジャパン医薬 総合研究所	〒350 川越市南台 1-3-2	①トランスジェニックマ ウス等を用いた発生生 物学的研究
谷口 泰史	東海大・医・分子生命 科学	〒259-11伊勢原市望星台	①赤血球分化 ②ホメオボックス遺伝子
中野 芳朗	三菱化成生命研神経発 生学部	〒194 町田市南大谷11	①細胞間相互作用
古屋 茂樹	理化研国際フロンティ ア糖細胞情報	〒351-01和光市広沢 2-1	①細胞表層複合糖質の機 能 ②ツメガエル、ラット小脳
高橋 伸子	明治乳業ヘルスサイエ ンス研究所発生生物学 室	〒250 小田原市成田540	①哺乳類の生殖細胞の操 作 ②マウス他
千葉 晶	国立基礎生物学研究所 細胞情報部門	〒444 岡崎市明大寺町	①神経形成 ②ショウジョウバエ
三谷 匡	明治乳業ヘルスサイエ ンス研究所発生生物学	〒250 小田原市成田540	①哺乳動物の生殖細胞の 操作 ②マウス他
稲葉 一男	東京大・理・附属臨海 実験所	〒238-02三浦市三崎町小網代 1024	①精子運動の分子機構 ②ウニ、シロサケ
猪飼 知子	旭化成工業(株)	〒410-23静岡県田方郡大仁町 三福632-1	①水晶体再生過程 ②アカハライモリ
上田 均	国立遺伝学研究所	〒411 三島市谷田1111	①昆虫の発生と転写調節 ②ショウジョウバエ、カ イコ
川野 仁	慶應義塾大・医・解剖	〒160 新宿区信濃町35	①神経系の発生と組織構 築 ②マウス・ラット
浜 千尋	国立精神神経センター	〒187 小平市小川東町4-1-1	①中枢神経系の発生と機 能構築 ②ショウジョクバ
林 茂生	国立遺伝学研究所	〒411 三島市谷田1111	①発生遺伝学 ②ショウジョウバエ
本多 久夫	新技術事業団・吉里再 生機構プロジェクト	〒724-05東広島市西条町御園 宇242-37 広島テクノプラザ内	①理論生物学、数理生物 学
松崎 文雄	国立精神神経センター ・遺伝子工学	〒187 小平市小川東町4-1-1	①神経の発生 ②ショウジョウバエ

横沢 英良	北海道大・薬	〒060 札幌市北区北12条西6丁目	①受精・発生の分子機構 ②ホヤ、ウニ、カエル
高木 信夫	北海道大・地球環境	〒060 札幌市北10条西8丁目	①哺乳類初期発生における遺伝子制御 ②マウス
天野 寿一	新技術事業団・吉里再生機構プロジェクト	〒300-26 つくば市東光台5-9-6 JMC 2F	①変態の分子発生学 ②かえる
学平沼 勉	大阪大・歯・口腔外科・第一講座	〒565 吹田市山田丘1-8	①ヒト顎下腺細胞の分化・増殖 ②ヒト
学小林 弘毅	広島大・生物生産・水族生化学	〒724 東広島市鏡山1	①受精・初期発生 ②ウニ、ヒトデ
学鈴木 厚	北海道大・薬・生体機能化婦	〒060 札幌市北区北12条西6丁目	①脊椎動物の体軸形成 ②ツメガエル
学新田 浩史	東京大・理	〒113 文京区本郷7-3-1	①神経発生 ②ショウジョウバエ
学福井 彰雅	横浜市立大・総合理学科	〒236 横浜市金沢区瀬戸22-2	①両性類の誘導現象 ②ツメガエル・イモリ
学村田 健二	上智大・生命科学研究所発生生物	〒102 千代田区紀尾井町7-1	①卵膜成分前駆体の研究 ②魚類
学木津川尚史	名古屋大・理・分子生物	〒464-01 名古屋市千種区不老町	①膜タンパク質A5の機能解析 ②マウス、ES細胞
学滝沢 聡	東京工業大・生命理工・生命理・分子発生学	〒227 横浜市緑区長津田町4259	①卵黄膜構成タンパク質 ②マボヤ
学中村 寿士	東京大・理・動物学	〒113 文京区本郷7-3-1	①成長因子と形態形成 ②ツメガエル
学松波 宏明	京都大・理・生物物理学	〒606-01 京都市左京区北白川追分町	①細胞の選択的接着と発生 ②マウス
学村田 武英	総合研究大学院大学遺伝子専攻	〒411 三島市谷田1111	①FTZ-F1の生体内機能解析 ②ショウジョウバエ
学安尾 仁良	京都大・理・動物学	〒606-01 京都市左京区北白川追分町	①脊索細胞の分化 ②マボヤ
学吉川 俊一	京都大・理・動物学	〒606-01 京都市左京区北白川追分町	①初期発生 ②ウニ、ヒトデ
学杉村 勇	筑波大・生物科学	〒305 つくば市天王台1-1	②ショウジョウバエ
学小泉 恵太	国立基礎生物学研究所	〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38	①神経発生 ②ショウジョウバエ

荒井 克俊	広島大・生物生産学	〒724 東広島市鏡山 1-4-4	①染色体操作と胚操作 ②ドジョウ類
山羽 悦郎	北海道大・水産	〒041 函館市港町 3-1-1	①発生工学 ②キンギョ・フナ
小林 浩士	千葉大・教養・生物学	〒263 千葉市稲毛区弥生町 1-33	①毛の発生・成長メカニ ズム ②マウス、ラット、ヒト
谷口 雅彦	愛知県コロニー発達障 害研究所形態学	〒480-03春日井市神屋町 713-8	①神経系におけるアポト ーシス
(学)永井 健治	筑波大・農・応用生物 化学	〒305 つくば市天王台1-1-1 筑波大学共同研究棟A-303	①初期発生における誘導 現象 ②ツメガエル
(学)広橋 教貴	東京工業大・生命理工 ・分子発生	〒227 横浜市緑区長津田町 4259	①精子・卵相互作用 ②マボヤ
(学)友常大八郎	大阪大・細胞生体工学 センター形態形成	〒565 吹田市山田丘 1-3	①Hox遺伝子による形態 形成制御 ②マウス
(学)金 大云	東京都立大・理・生物 ・発生学	〒192-03八王子市南大沢 1-1	①消化器管上皮のDNA 合成細胞 ②ニワトリ
(学)関戸 良平	大阪大・細胞生体工学 センター形態形成	〒565 吹田市山田丘 1-3	①8 クリスタリン遺伝子 の転写制御 ②ニワトリ
大内 淑代	徳島大・工学・生物工 学	〒770 徳島市南常三島町2-1	①眼の発生・分子発生学 ②ニワトリ、ラット
古田 泰秀	理化研・ライフサイエ ンス筑波研究センター 分析腫瘍学	〒305 つくば市高野台3-1-1	①哺乳類発生の分子機構 ②マウス
村上 正弘	科学技術庁放医研・障 害基礎研究部	〒263 千葉市稲毛区穴川 4-9-1	①卵黄代謝、細胞周期、 遺伝子発現 ②メダカ、マウス
米澤 敏	愛知県コロニー発達障 害研究所発生学	〒480-03春日井市神屋町 713-8	①神経系の発生、組織構 築 ②哺乳類
(学)井内 良仁	広島大・理・遺伝子科 学遺伝子発現機構学	〒724 東広島市鏡山 1-3-1	①初期発生における遺伝 子発現 ②ウニ
(学)斧 正一郎	千葉大・理・生物・形 態学講座	〒263 千葉市稲毛区弥生町 1-33	①細胞骨格形成の制御機 構
田島 淳史	筑波大学農林学系	〒305 つくば市天王台1-1-1	①PGCを用いた遺伝資源の保存 ②ニワトリ

(学)川原 裕之	北海道大・薬・薬品生 物化学講座	〒060 札幌市北区北12条西 6丁目	①分裂周期におけるプロ テアリームの挙動 ②マボヤ
黒尾 誠	東京大・医・第三内科	〒113 文京区本郷7-3-1	①発生工学・分子生物学 ②マウス
名古屋博之	農林水産省養殖研究所	〒519-04三重県度会郡玉城町 昼田224-1	①成長ホルモン・人為的 単為発生 ②魚類
安井 金也	鹿児島大・歯・口腔解 剖第一講座	〒890 鹿児島市桜ヶ丘 8-35-1	①頭部形成 ②ジャコウネズミ
二宮洋一郎	東京医科歯科大・発生	〒113 文京区湯島1-5-45	①細胞分化とDNA複製 ②ラット・マウス
内山 孝司	新技術事業団吉里再生 機構プロジェクト	〒300-26つくば市東光台5-9-6 日本重化学工業㈱2F	①四肢再生機構 ②アカハライモリ、アホ ロートル
五十嵐永喜	マリオン・メレル・ダ ウ㈱	〒573 枚方市招提田近3-11	①中軸骨格系の異常誘発
多田 正純	北海道大・薬・生体機 能化学	〒060 札幌市北区北12条西 6丁目	成長因子及びその受容体 ②ゼブラフィッシュ
(学)吉田 道生	東京理科大・基礎工研 究科生物学	〒278 野田市山崎2641	②マウス

<住所・所属変更>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)
西山 一朗	駒沢女子大・生物	〒206 稲城市坂浜238
前田 美香	理化学研究所フォトダイナミクス研究 センター	〒982 仙台市青葉区長町越路19-1399
田中 智	東京大・農・応用動物科学	〒113 文京区弥生1-1-1
金井 克晃	都臨床研・超微形態	〒113 文京区本駒込3-18-22
横内 裕二	名古屋大・理・分子生物	〒464-01名古屋市千種区不老町
浅島 誠	東京大・教養・生物	〒153 目黒区駒場3-8-1
尾崎 宏基	長崎大・医・解剖学	〒852 長崎市長本1-12-4
高田 邦昭	群馬大・内分泌研究所形態学部門	〒371 前橋市昭和町3-39-15
広瀬 裕一	日本大・農獣医・生物	〒252 藤沢市亀井野1866
浜崎 浩子	国立精神神経センター・疾病研究第四 部	〒187 小平市小川東町4-1-1
玉井 淑貴	萬有製薬分子生物学研究所発生動物	〒300-33つくば市大久保3 つくばテクノパーク大穂
渡部 美穂	広島大・理・生物科・発生生物学講座	〒724 東広島市鏡山1-3-1
山下 正兼	北海道大・理・生物科	〒060 札幌市北区北10条西8丁目

宮脇 恭史	岡山大・理・附属臨海実験所	〒701-43岡山県邑久郡牛窓町鹿忍
		130-17
大久保 悌	国立遺伝研・遺伝実験生物保存研究センター発生工学	〒411 三島市谷田1111
清本 正人	岡山大・理・附属臨海実験所	〒701-43岡山県邑久郡牛窓町鹿忍
		130-17
松本真佐美	山形大・理・生物	〒990 山形市小白川町 1-4-12
利根川 あかね	北海道大・薬・生体機能化学	〒060 札幌市北区北12条西 6 丁目
天野 実	広島大・総合科学部	〒724 東広島市鏡山 1-7
岡田 善雄	大阪大・細胞生体工学センター	〒565 吹田市山田丘 1-3
帯刀 益夫	東北大・加齢医学研究所細胞生物学	〒980 仙台市青葉区星陵町 4-1
河原 明	広島大・総合科学・情報行動基礎	〒724 東広島市鏡山 1-7
渡辺 一雄	広島大・総合科学部	〒724 東広島市鏡山 1-7
岩倉洋一郎	東京大・医科研・実験動物研究施設	〒108 港区白金台 4-6-1
中村 正久	広島大・理・附属両生類研究施設	〒724 東広島市鏡山 1-3-1
桜井 勝	金沢大・理・生物	〒920-11金沢市角間町
木戸 充	大阪大・細胞生体工学センター細胞工学	〒565 吹田市山田丘 1-3
黒岩 厚	東北大・加齢医学研究所・細胞生物学	〒980 仙台市青葉区星陵町 4-1
小野里 坦	水産庁養殖研究所南勢庁舎	〒516-01三重県度会郡南勢町中津浜浦
		422-1
矢内 信昭	東北大・加齢医学研究所細胞生物	〒980 仙台市青葉区星陵町 4-1
大石 道夫	東京大・分子細胞生物学研究所	〒113 文京区弥生 1-1
芋川 浩	新技術事業団吉里再生機構プロジェクト	〒300-26つくば市東光台
		日本重化学工業(株)2F
上野 直人	北海道大・薬・生体機能化学	〒060 札幌市北区北12条西 6 丁目
三浦 直行	大阪大・細胞生体工学センター	〒565 吹田市山田丘 1-3
日下部眞一	広島大・総合科学部	〒724 東広島市鏡山 1-7
池松 真也	明治乳業細胞工学センター	〒250 小田原市成田540
松居 靖久	東北大・加齢医学研究所細胞生物学	〒980 仙台市青葉区星陵町 4-1
天野 實	広島工業大学環境学部	〒731-51広島市佐伯区三宅 2-1-1
岡田 節人	生命誌研究館館長室	〒569 高槻市紫町 1-1
越田 豊	大学入試センター研究開発部	〒152 目黒区駒場 2-19-23
高崎 裕子	大阪教育大・理科教育	〒582 柏原市旭ヶ丘 4-698-1
山形 達也	東京工業大・生命理工・生体分子工学	〒227 横浜市緑区長津田町4259
金田 照夫	八代工業高等専門学校生物工学	〒866 八代市平山新町2627
吉田 昭広	生命誌研究館	〒569 高槻市紫町 1-1
三田 雅敏	帝京短期大学	〒151 渋谷区本町 6-31-1
林 謙介	群馬大・医・行動医学研究施設	〒371 前橋市昭和町 3-39-22
三木 清史	名古屋大・生物分子応答研究センター 器官形成統御	〒464 名古屋市千種区不老町

若松 義雄	大阪大・細胞生体工学センター形態形成	〒565 吹田市山田丘 1-3
岩下 淳	久留米大・医・分子生命	〒830 久留米市旭町67
舟橋 淳一	京都府立医大・花園学舎生物	〒603 京都市北区大將軍西鷹司町13-2
井筒 ゆみ	北海道大・理・生物	〒060 札幌市北区北10条西 8 丁目
松尾 勲	理化学研究所・ライフサイエンス筑波研究センター分子腫瘍	〒305 つくば市高野台 3-1-1
武田 裕彦	九州大・理・生物	〒812 福岡市東区箱崎 6-10-11
荒木 正介	生命誌研究館研究部・社経生物	〒569 高槻市紫町 1-1
近藤 寿人	大阪大・細胞生体工学センター	〒565 吹田市山田丘 1-3
植田 孝之	新潟大・遺伝子実験施設	〒950 新潟市旭町通番町757
高橋 直樹	大阪大・細胞生体工学センター形態形成	〒565 吹田市山田丘 1-3
日向 昌司	東京工業大・生命理工学部生体分子工学科	〒227 横浜市緑区長津田4259
高橋 直	生命誌研究館	〒569-01高槻市紫町 1-1
東 雄二郎	大阪大・細胞生体工学センター形態形成	〒565 吹田市山田丘 1-3
東海林博樹	大阪大・細胞生体工学センター形態形成	〒565 吹田市山田丘 1-3
仲嶋 一範	理化研・ライフサイエンス筑波研究センター分子神経生物学	〒305 つくば市高野台 3-1-1
下野 明彦	大阪大・細胞生体工学センター形態形成	〒565 吹田市山田丘 1-3

〈退 会〉

市川 眞澄, 竹内 正紀, 大杉 万美, 栗原 靖之, 糟谷 泰代, 田原 胖, 川井 ゆか,
佐々木 一, 小林 直正, 土屋 利江, 阿部 宏之, 田坂 昌生, 中藤 博志

〔賛助会員〕

組織培養はパイレックス・コーニングの岩城硝子(株)	〒100 千代田区丸の内3-2-3 T E L 03-3214-6221
生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書(株)	〒210 川崎市幸区塚越2-260 T E L 044-533-0470
試薬・機器の御用命は名古屋片山化学(株)まで	〒460 名古屋市中区丸の内3-11-14 T E L 052-971-6531
日製産業株式会社	〒453 名古屋市中村区名駅4-6-18 (名古屋ビル内) T E L 052-583-5846
発生学をはじめとする生物科学書の出版社・培風館	〒102 千代田区九段南4-3-12 T E L 03-3262-5256
藤本理化	〒113 文京区向ヶ丘2-34-12 T E L 03-3827-8151
三菱化成生命科学研究所	〒194 町田市南大谷11 T E L 0427-24-6226
明治乳業(株)ヘルスサイエンス研究所	〒250 小田原市成田540 T E L
試薬及び理化学機器販売の理科研(株)	〒463 名古屋市守山区元郷2-107 T E L 052-798-6151
科学の技術に奉仕する理工学社	〒113 文京区本駒込5-9-10 T E L 03-3928-5211
次代を担うバイオテクノロジー和研薬(株)	〒606 京都市左京区北白川西伊織町25 T E L 075-721-0491

(50音順)

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 江口 吾朗

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約900名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願い申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門

-----切-----り-----取-----り-----線-----

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所

会 社 名

担当者名
電話番号

㊞

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学、医学、薬学、農学をはじめ分子生物学、細胞生物学、遺伝学など、さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり、国内外に約900人の会員を持っております。

英文学術雑誌 *Development, Growth and Differentiation* は、日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し、国内に約1,000部、国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下、本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等、是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
D G D 本部	1 頁	年 6 回	150,000円
	半 頁	〃	78,000円
インフォメーション サーキュラー	1 頁	年 3 回	30,000円
	半 頁	〃	15,000円

申し込み先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門

----- 切 り 取 り 線 -----

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

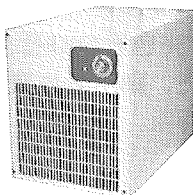
広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ D G D 本部	1 頁
☐ 〃	半 頁
☐ サークュラー	1 頁
☐ 〃	半 頁
住 所	
会 社 名	印
担当者名	
電話番号	

加熱冷却ユニット

クーラー・ヒーターはチタン製。淡水はもちろん海水や薬品液にも使用できる高性能の循環式小型加熱冷却装置です。

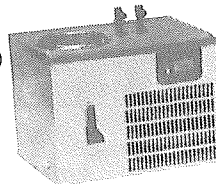
形式	クーラー	ヒーター	概略水量	価格
HC061A-3	65W	300W	120ℓ	¥213,000
HC101A-3	100W	300W	160ℓ	¥225,000
HC131A-5	130W	500W	260ℓ	¥239,000
HC201A-5	200W	500W	360ℓ	¥258,000
HC301A-5	300W	500W	670ℓ	¥321,000
HC401A-5	400W	500W	1080ℓ	¥360,000



低温恒温循環水槽

実験台上でも使用できるように極めてコンパクトにまとめた低温恒温循環水槽です。水温は低温から高温までを任意に設定することができます。外部循環機能をもたえておりますので恒温水槽のほか、カラムの冷却、保温など幅広い用途があります。

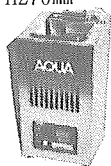
形式:CT 65-300-S
使用温度範囲:0~50℃ (±0.1℃)
外形寸法:W420×D330×H340mm
槽内寸法:φ153×H187mm
冷凍機:65W ヒーター:300W
価格:¥250,000



超小型ウォーターバス式インキュベーター

極めてコンパクトにまとめた超小型の恒温槽です。50ml程度のピーカーや小型の試験管数本の恒温を得る用途に適しています。

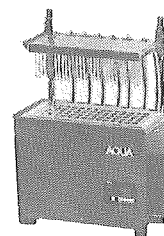
形式:CTH-100(加熱専用型)/CTC-100(加熱冷却型)
外形寸法:146×176×h225mm/146×176×h270mm
温度範囲:室温+5~60℃/+5~60℃
温度精度:±0.05~±0.1℃
槽材質:ステンレス SUS304
槽内寸法:98×100×h59mm
本体価格:¥98,000/¥168,000



ゼットコンデンサー

空気または窒素ガスを試験管内に吹きつけ、溶媒の蒸発を促進し、濃縮時間を短縮する装置です。

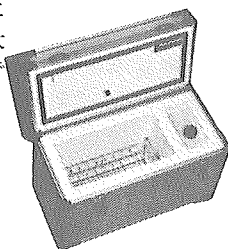
形式:JC 70-300
外形寸法:350×191×h540mm
槽内寸法:300×120×h70mm
温度範囲:室温~100℃ ±0.4deg
吹出ノズル本数:70本
ヒーター:300W
空気ポンプ:20W
電源:100V
価格:¥310,000



恒温コンテナ

蓄冷体の融解速度を微量にコントロールして恒温を保つ小型の恒温輸送用コンテナです。凍結したら困るあらゆる物体の低温での恒温輸送に威力を発揮します。商用電源、大型バッテリーを使用しないので、可動性に富みどこでも使えます。

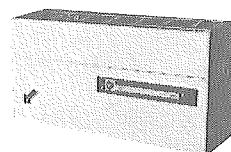
形式:CTC-422
外形寸法:407×193×H298mm
庫内寸法:246×122×H200mm
コントローラー:デジタル設定、デジタル表示
価格:¥88,900(蓄冷体-5℃付)



温度勾配装置(ウォーターバス)

温度調節水槽はそれぞれ独自の温度に設定できます。精度の高い恒温が得られます。温度の設定はデジタル式。振とう装置付きもあります。

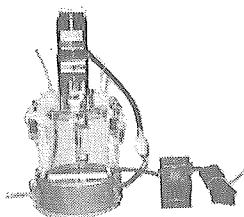
形式:TGW-3(三連)/TGW-5(五連)
使用温度範囲:0~50℃
温度調節精度:±0.05~±0.1℃
槽内寸法:150×260×150×3/×5
冷凍機:200W/300W
ヒーター:90W×3/×5
価格:¥788,000/¥970,000



本城式プランクトン濃縮装置

プランクトンを効率よく回収する装置です。プランクトン細胞の崩壊が少なく、低濃度で分布している種類を観察することができます。ろ過水はプランクトンの体液が混入しない純水なものが得られます。ろ紙の表面は目詰まりしにくく早い流速が得られます。

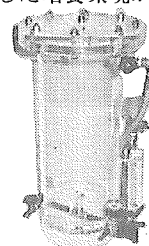
形式:PC15-S
回収率:80~95%
価格:¥98,000



加圧式インキュベーター

空気または不活性ガスで加圧した環境下で各種生物を培養する装置です。新鮮な空気を常に供給しながら一定圧を保つことができますので安定した培養環境が得られます。

形式:PI 203
最大使用圧力:2.5kg/cm²
内寸法:φ190×h440mm
外形寸法:φ280×h530mm
本体材質:透明アクリル
価格:¥198,000(加圧ポンプは別)
給水装置 減圧弁・安全弁付



生細胞の染色に

細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせた、細胞蛍光標識キットです。

細胞機能に影響しません

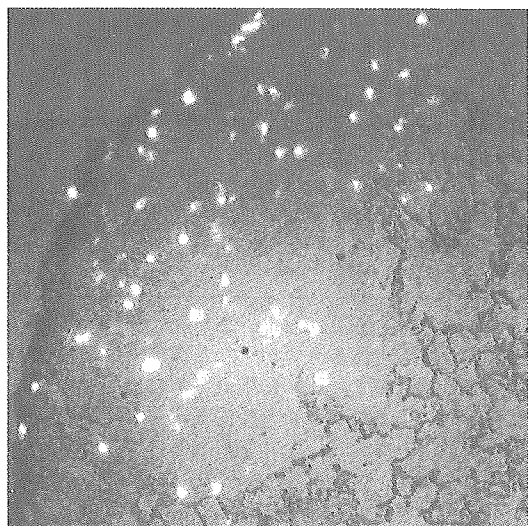
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

簡便です

従来 ^{51}Cr 等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

安定です

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では *in vivo* でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元



大日本製薬株式会社
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94
TEL 大阪 (06) 386-2164 (代表)
東京 (03) 3828-6544 (代表)

マウスのテラトーマ

—EC細胞による哺乳動物の実験発生学—

森脇和郎／序

野口武彦 村松 雷／編集

定価 3914 円(税込)A5判・296頁・並製

テラトーマの生物学的な知識, EC細胞の種類と成立, EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究, EC細胞のキメラ動物への応用などについて, 研究の進展を紹介し, その理論と実験技術を解説してあります。

哺乳動物の初期発生

—基礎理論と実験法—

妹尾左知丸 加藤淑裕 入谷 明

鈴木秋悦 館 郷／編集

定価 15450 円(税込)B5判・480頁・上製

初期発生の基礎理論をはじめに説明し, ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してあります。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は, 医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

体細胞遺伝学

山根 績 岡田善雄 堀川正克 黒木登志夫／編集

定価 10094 円(税込)A5判・720頁・上製

HVJによる細胞融合法, 薬物や放射線, 化学物質を用いた細胞の突然変異による研究, あるいは遺伝子組換え法を使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

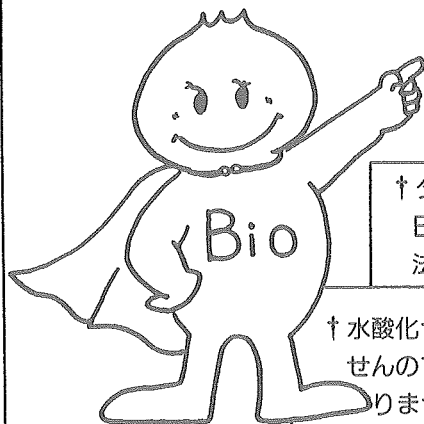


理工学社

東京都文京区本駒込5-9-10 電話 03(3828)5211(代) 振替口座番号 東京1-34676 〒113

Silver Stain KANTO II

電気泳動用銀染色キット



↑ゲルのバックグラウンドが上がらないため、より鮮明な泳動像が得られます。

↑タンパク質はCoomassie Brilliant Blue法(CBB法)の10~100倍、核酸ではEthidium Bromide法の5~10倍の感度が得られます。

↑水酸化ナトリウムおよびアンモニア水を使用していないので爆発性のある銀アミドを生成する危険性がありません。

お問い合わせ、資料請求は下記まで。

関東化学株式会社
試薬事業本部

〒103 東京都中央区日本橋本町3-2-8 03(3663)7631
〒541 大阪市中央区瓦町2-5-1 06(222)2796
〒812 福岡市博多区山王1-1-32 博多堀池ビル 092(414)9361

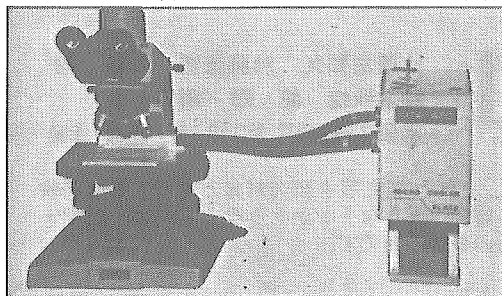
新発売

冷却タイプ

マイクロクーラー・プレート®

(顕微鏡用透明冷却板)

特許申請済



マイクロクーラー・プレートは、室温から -25°C (MC-100)の範囲で霜(曇り)を防止した状態で設定した温度に自動制御します。電子冷却方式の為液体窒素が不要で、更に60mmシャーレーあるいはスライドガラスがセットできる広い透明冷却面となっています。

機種	設定温度	精度	標準価格
MC-10	室温から 0°C	$\pm 0.5^{\circ}\text{C}$	58万円
MC-100	室温から -25°C	$\pm 1^{\circ}\text{C}$	128万円

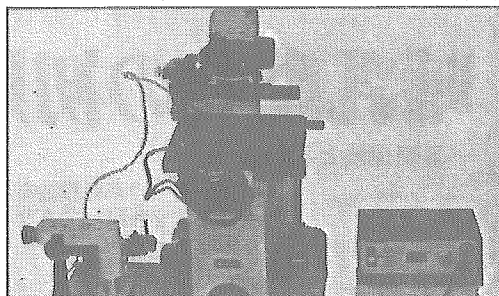
- 「冷却タイプ」「加温タイプ」のカタログのご請求は本社営業部へ。
- プレート形状、ガラス面への穴開け加工等御相談に応じます。

加温タイプ

マイクロウォーム・プレート®

(顕微鏡用透明加温板)

特許申請済



マイクロウォーム・プレートは、透明なガラス板の面全体が発熱体ですのでむらのない均一な表面温度を保ちます。(設定温度：室温 $\sim 50^{\circ}\text{C}$)精密定温下での培養状態観察に、又、細胞組織の電位測定等に活用されております。用途により多機種取り揃えております。

株式会社 北里サプライ

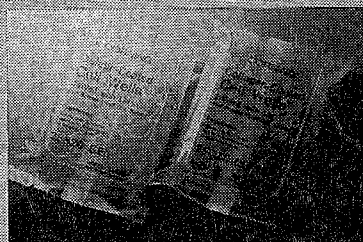
本社営業部 静岡県富士宮市三園平1429 〒418

TEL.(0544)27-8831 FAX.(0544)27-6060

東京出張所 TEL.(03)3903-7410

CORNING BETTER SURFACE PRODUCTS

コーティングの時間と
コンタミネーションの不安を解消



■ファイブロネクチンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000FN	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	60
25010FN	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	40
25020FN	ディッシュ100φ	55cm ²	10	40

○ウシ血漿由来ファイブロネクチン

■コラーゲンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000COLI	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010COLI	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020COLI	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810COLI	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820COLI	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860COLI	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
25100COLI	フラスコ 25cm ³	25cm ²	10	60

○ブタ臍由来酸可溶性TypeIコラーゲン

■ゼラチンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000GEL	ディッシュ 35φ	9cm ²	10	200
25010GEL	ディッシュ 60φ	21cm ²	10	200
25020GEL	ディッシュ100φ	55cm ²	10	120
25810GEL	マイクロプレート6F	9.4cm ²	1	20
25820GEL	マイクロプレート24F	2cm ²	1	20
25860GEL	マイクロプレート96F	0.32cm ²	1	20
25100GEL	フラスコ 25cm ³	25cm ²	10	60

○豚皮由来ゼラチン

ご使用に先立ちサンプルによる事前チェックをおすすめします。35%ディッシュ・サンプルパックを用意しておりますのでご希望の方は本社又は下記支店へご連絡下さい。

岩城硝子株式会社

本社第3営業部 〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 ☎03(214)6221(直)
 ●大阪支店 ☎06(362)6291(代) ●名古屋支店 ☎052(211)3855(代)
 ●九州支店 ☎092(451)5606(代) ●広島支店 ☎082(248)0293(代)
 ●札幌営業所 ☎011(221)3477(代)